～日本小児科学会の「知っておきたいわくちん情報」～

ヒトパピローマウイルスワクチン

どんな病気ですか?

ヒトパピローマウイルスの感染は、子宮頸がんや良性のいぼ（尖圭コンジローマ）などの原因となります。日本では毎年約8,500人の女性が子宮頸がんにかかり、約2,500人が死亡しています。20代後半から患者数が増え、40歳前後でピークになります。

子宮頸がん

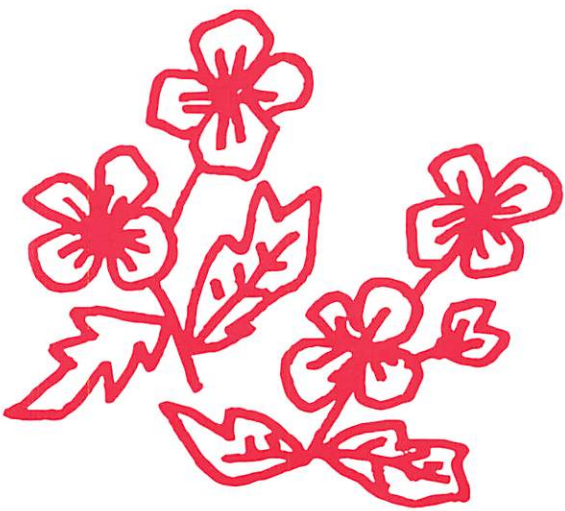
ウイルスには多くの型がありますが、その中でも少なくとも15種類はがんを起こす高リスク型ヒトパピローマウイルスと呼ばれ、特に16型と18型が子宮頸がん全体の3分の2以上の原因となっています。子宮頸がんやその前がん病変の診断は、まず膣鏡を用いた診察で行われます。さらに細胞診（パップテスト）も用いられます。疑わしい部位は生検（組織を取って顕微鏡で観察）を行って、診断を確定します。子宮頸がん検診は、細胞診に加えてヒトパピローマウイルスの遺伝子がいるかどうかの検査を組み合わせて行うことがあります。成人女性にとって、子宮頸がん検診を受けることは子宮頸がんを早期に見つける点で重要です。

子宮頸がん以外のがん

ヒトパピローマウイルスは、女性には子宮頸がん以外にも、膣、外陰部、肛門、そして咽頭（のど）のがんを起こします。また、男性にも陰茎、肛門、そして咽頭のがんを起こします。

尖圭コンジローマ（いぼ）

また、ヒトパピローマウイルスは、尖圭コンジローマというカリフラワー状の良性のいぼを性器の周りに作ります。尖圭コンジローマの患者数は国内で年間55,000人と推定されています。多くは、低リスク型のウイルス（特に6型と11型）によっておこります。



どのように感染しますか?

ヒトパピローマウイルスは皮膚と粘膜が直接触れることによって感染します。性器病変を起こすものは、通常性行為によって感染します。ヒトパピローマウイルスは100種類以上の型がありますが、皮膚に感染するものは皮膚型ウイルス、粘膜に感染するものは粘膜型ウイルスと呼ばれます。

ヒトパピローマウイルスに感染する人はたくさんいますが、その中で持続感染（感染後、ウイルスを体内に持ち続ける状態）する人は一部のみです。

このウイルスは皮膚や粘膜のごく表面にのみ存在しますので、私たちの免疫の仕組みから逃れ、感染しても抗体を作るような防御反応がほとんど起こりません。そのため持続感染が起こってしまうと考えられています。そして持続感染した人の一部に、子宮頸がんなどの病気が起こります。

ワクチンをいつ、何回接種しますか?

2価ワクチン（サーバリックス®）

1回目から
1か月以上後

1回目から6か月以上、
かつ2回目から2か月半以上

12歳～16歳（小学6年生～高校1年生相当）

4価ワクチン（ガーダシル®）

1回目から
2か月以上後

1回目から
6か月以上後

12歳～16歳（小学6年生～高校1年生相当）

現在、日本では、子宮頸がんの主な原因となる16型と18型を予防する2価ワクチンと、それらに加え、尖圭コンジローマ（いぼ）の原因となる6型と11型も予防する4価ワクチンがあります。

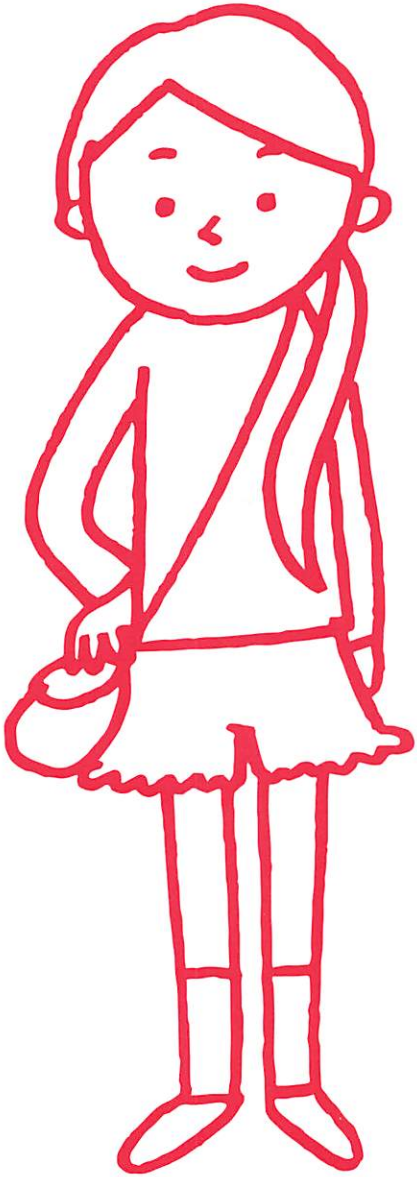
通常、12歳～16歳（小学校6年生から高校1年生相当）の間に3回接種します。2価ワクチンは1回目と2回目の間は1か月、1回目と3回目の間は6か月あけます。4価ワクチンは1回目と2回目の間は2か月、1回目と3回目の間は6か月あけます。

※2価ワクチンは10歳以上で、4価ワクチンは9歳以上で接種できます。

ワクチンの効果

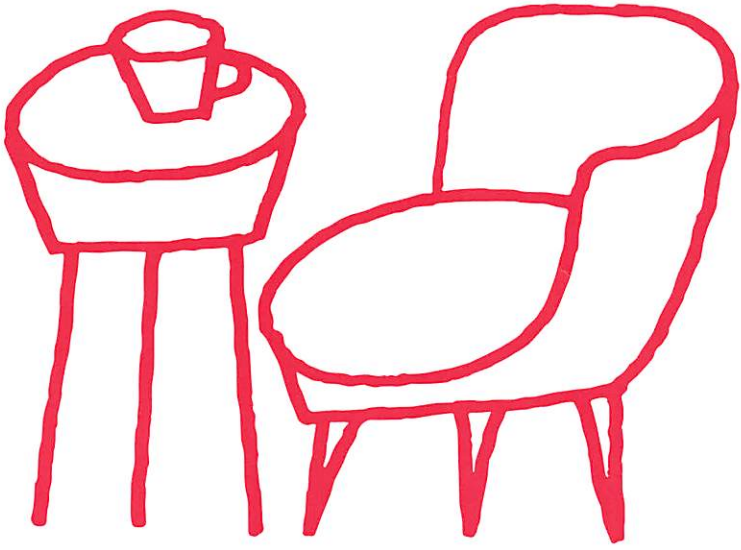
ワクチン接種によって、16型と18型による子宮頸がんの前がん病変（放っておくと子宮頸がんになってしまうもの）の発生を95%以上防ぐことができます。4価ワクチンであれば、6型と11型の感染（尖圭コンジローマの発症）も同様に防ぐことができます。現在、ワクチンの効果は接種後8～10年経っても続くことが確認されています。

ただし、ワクチンを接種しても子宮頸がん検診は必要です。子宮頸がんを起こすウイルスのうち、ワクチンは16型と18型しか防ぐことはできません。成人になったら必ず子宮頸がん検診は受けるようにしましょう。



ワクチンの副反応

接種したところの痛みやはれはよく起こります。たまに微熱が出る人もいます。痛みや緊張から迷走神経反射を起こし、ふらふら感、冷や汗、血圧低下のために失神してしまうことも稀にありますので、接種の後はしばらく休んでいた方が安心です。



重大な副反応は極めて稀です。日本国内でワクチンを接種した人の中に痛み、運動障害、不随意運動、その他多彩な症状が報告されていますが、同様の症状はワクチンを接種していない同じ世代の女性や男性にも報告されており、因果関係は証明されていません。WHO（世界保健機関）をはじめ、世界中でこのワクチンは安全なワクチンとして認められています。

ワクチンが接種できない人は誰ですか?

接種を受けることができない、いわゆる接種禁忌の人

- 明らかな発熱を認めた場合
- 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな者
- ワクチンの成分によって過敏症を起こしたことがある場合
- 上記以外で予防接種を行うことが不適当な場合

接種を受けるにあたって注意が必要な人

接種前にかかりつけ医によく相談しましょう

- 血小板減少症や凝固障害がある人
- 心臓・血管・腎臓・肝臓・血液に持病がある人、発育に障害がある人
- これまでの予防接種で接種後2日以内に発熱や全身性発疹等のアレルギーを疑う症状を認めた人
- 過去にけいれんの既往がある人
- 過去に免疫不全の診断がなされている人
- 先天性免疫不全症の病気をもっている近親者がいる人
- 妊娠または妊娠している可能性がある女性

発　行　日本小児科学会　2018/03作成 ver.1

この冊子は、日本小児科学会の「知っておきたいわくちん情報」を加工・修正して作成しました。

印刷　愛媛県医師会・愛媛県産婦人科医会・愛媛県小児科医会